

社会体育の現状との方策

—民間クラブ会員の意識調査から—
(昭和50年9月2日受理)

富岡元信*・佐々木吉蔵*
山田良樹*・富田幸博*

I 研究目的

戦後、我が国の生活水準は急速に発展をなして来た。特に、科学・機械工学の進歩にともない、社会・経済・文化の変化は我々人間生活を著しく変化させ、日常生活における身体活動を次第に少なくするとともに、一方では生きることに必要な自然環境の破壊や公害の発生等、人間の健康や体力にとってゆゑしい問題を数多く生み出し、そこには「人間不在」「生きる」ことを忘れてるように思われる。

昭和36年(1961年)6月16日、法律第141号「スポーツ振興法」が制定されて以来、我が国の社会体育も人間復活のため発展をみせつゝあるが、その歴史は浅く、スポーツや体育的身体活動が国民生活に定着するためにはなお多くの努力と年月が必要である。

そこで、「健康で文化的な生活を営むために体育・スポーツを日常生活と密着させ、人間の生きるうえにどう寄与させるか。」をテーマに日本の社会体育の現状を把握し、これからの社会体育振興への方策を立てたい。

昭和47年(1972年)12月20日、保健体育審議会は、(1)「体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について」の答申をした。その答申によると、長期的な展望に立ってすべての国民がいわゆる生涯体育を実践できるような諸条件を整備するための基本方策を樹立し、真剣にその実施に取り組むべきである。

これによって体育・スポーツを振興し、人間

* 体育管理学研究室

尊重を基盤とした健康な社会を建設することこそ、今後の日本の重要な課題である。と述べ、その具体的な方策として、施設の整備、自発的なグループ活動の促進、指導者の養成、資金の確保とその運用、等を指摘している。今回は、「自発的なグループ活動の促進」を取り上げ、その考察を進めることとする。

II 研究調査方法

研究調査の対象になった民間クラブは、東京より、約35km離れた神奈川県厚木市(昭和47年現在、面積9,286km²に、人口94,841名)健康体操センター(敷地面積990m²、建物面積330m²)である。

1. 対象

運動するに適當であると医師が認めた人で、3才から60才までを対象にした。会員380名の中より無作為に100名を抽出し、昭和49年5月～6月調査実施した。

2. 調査内容

調査は質問紙によるもので内容は次の通りである。

入会の動機

- (1) 健康な体をつくりたい
- (2) 強い体をつくりたい
- (3) 技術を修得したい
- (4) 楽しみを持ちたい
- (5) 会員と友達になりたい
- (6) 子供の健康教育に役立てたい
- (7) 子供をあづけたい
- (8) 暇だから

社会体育の現状とその方策

(9) その他

継続の理由

- (1) 会員どうしの話しが面白い
- (2) 日常生活のリズムになっている
- (3) 効果が現われてきた
- (4) 指導者が良い
- (5) サウナ風呂があるから
- (6) 他の遊びより費用がかゝらない
- (7) 子供の教育のため自らトレーニングする
- (8) トレーニング後の満足感がある
- (9) その他

退会の理由

- (1) 施設が悪い
- (2) 指導者が悪い
- (3) 指導内容が悪い
- (4) 交通に不便
- (5) 効果が現われない

(6) 会員との関係がうまくいかない

(7) 面白くない

(8) あきがきた

(9) 暇がなくなった。

(10) 会費納入が困難

(11) その他

3. 施設運営の概要

調査クラブ施設のフロアーには、体操競技用器具（吊輪・平行棒等5点）、マット（ロング2点、ショート2点、エバマット2点）、ウエイトトレーニング用器具（10点）、卓球台（4台）、ランニングマシン（1台）、トランポリン（1台）等があり、付帯施設として、サウナ風呂、シャワー室、浴槽、更衣室、便所等完備されている。

指導員は、専任指導員3名、非常勤5名である。指導内容は次の通りである。

	月	火	水	木	金	土	日
10							
11	ヨ-ガ 10:30~11:30	美容 トレーニング 10:30~11:30	ヨ-ガ 10:30~11:30	美容 トレーニング 10:30~11:30	ヨ-ガ 10:30~11:30	美容 トレーニング 10:30~11:30	日曜日 1:00オープン 6:00クローズ
12							
1	リハビリテーション 1:00~1:45		リハビリテーション 1:00~1:45		リハビリテーション 1:00~1:45		体操競技 専門教室 1:00~6:00
2					トランポリン 教室 4:00~6:00	3才~小6 体育教室 B班	
3		3才~小6 体育教室 B班	剣道教室	3才~小6 体育教室 B班		小1~中3 体育教室 A班	
4	剣道教室 3:30~4:30	小1~中3 体操教室 A班	3:30~4:30	小6~中3 体操教室 A班	肥満児教室		
5	小林寺拳法 子供(女子)部 5:00~6:00	トラン ギン	小林寺拳法 女子 5:00~6:00		小林寺拳法 子供、女子 5:00~6:00	タ ン ブ ダ ン ス	
6	体操競技 6~8時	女子美容 トレーニング 6~7時	体 操 競 技	女子美容 トレーニング 6~7時	体 操 競 技	体 操 # 体 力 ト レ ニ ン グ	
7		5 時 ~ 7 時	体 操 競 技	体 操 競 技	体 操 競 技	4:00 ~ 9:00	
8	小林寺拳法 8:00~9:00		小林寺拳法 8:00~9:00		小林寺拳法 8:00~9:00		
9							

Ⅲ 結果と考察

クラブ会員には、15才～18才（高校生に該当する年齢）層はいない。したがって3才～14才までの子供と19才～60才の大人を対象に質問紙による調査を実施した。結果子供35名、大人65名の回集を得たので二つに分けて考察する。

表1. 継続者数と退会者数

	子 供		大 人	
	3～14才		19～60才	
継続者	24名	69%	44名	68%
退会者	11名	31%	21名	32%
計	35名		65名	

1. 入会の動機

昭和47年5月オープン以来、入会者380名の数に達した。そのうち今回は、100名について入会の動機をみると、表2、図1に示すように全体として一番多いのは、「健康な体をつくりたい」と希望する者が42%を占めている。次いで「強い体をつくりたい」が17%、「楽しみを持ちたい」が14%と続いている。

大人と子供に分けてみると、子供達は「強い体をつくりたい」とか、「技術を修得したい」という積極的にいどむ希望が多いのに対し、大

表2. 入会の動機

入会の動機	子 供		大 人		全 体	
	3～14才		19～60才			
	人数	%	人数	%	人数	%
1. 健康な体をつくりたい	0		42	64	42	42
2. 強い体をつくりたい	16	46	1	1	17	17
3. 技術を修得したい	9	26	0		9	9
4. 楽しみを持ちたい	4	10	10	15	14	14
5. 会員と友達になりたい	0		5	8	5	5
6. 子供の健康教育に役立てたい	0		3	6	3	3
7. 子供をあづけたい	0		0		0	
8. 暇だから	0		0		0	
9. 肥満	3	9	2	3	5	5
10. その他	3	9	2	3	5	5
計	35	100	65	100	100	100

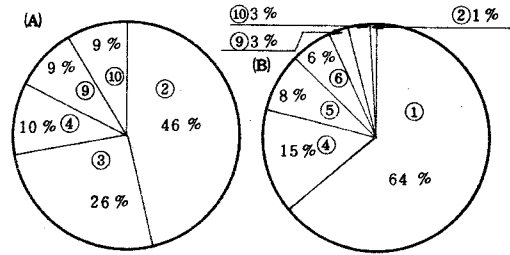


図1. 入会の動機(A)子供, (B)大人

人達は「健康な体をつくりたい」とか、「楽しみを持ちたい」といったやわらかい表現で、しかも日常生活に運動をとり入れる機会がないので、なんとか運動をしたいと云う希望になっている。子供の本能である遊びから可能性を追求する年齢を過ぎ大人としての仕事を持ち、生計をたてなければならなくなるところに分岐点があるように思う。学校を卒業し、社会人として働く、仕事を持つと云ったところに体育・スポーツに対する希望・意識がかわるのではないであろうか。

この調査で考えさせられる事は、親は「子供の健康教育に役立てたい」6%と考え入会させるが、子供は親の気持を理解できず、その他の項に「親に強制されて」9%と答えているところに、親子のくいちがいが見られる。親は子供に対し理解できるように説明し、子供の納得の行くよう話し合う必要がある。その他、肥満体なので、痩せたいと希望するのが大人、子供計5%もあることはみのがせない。ともあれ、同じ入会するにしても、その目的は大人と子供では大きく違い、個人により違うことに気がつかねばならないであろう。

2. 継続の理由

体育・スポーツ活動に目的を持ち入会した会員に対し、入会后活動を継続している理由を調査した。その結果は、表3、図2に示すように全体として一番多いのは、「効果が現われてきた」21%、次いで「会員どうしの話が面白い」19%、「トレーニング後の満足感がある」14%.

表 3. 継続の理由

継続の理由	子 供		大 人		全 体	
	3~14才		19~60才			
	人数	%	人数	%	人数	%
1. 会員どうしの話しが面白い	5	21	8	18	13	19
2. 日常生活のリズムになっている	1	4	7	16	8	12
3. 効果が現われてきた	6	25	8	18	14	21
4. 指導者が良い	5	21	3	7	8	11
5. サウナ風呂があるから	0		6	14	6	9
6. 他の遊びより費用がかからない	0		0		0	
7. 子供の教育のため自らトレーニングする	0		1	2	1	2
8. トレーニング後の満足感がある	0		10	23	10	14
9. その他	7	29	1	2	8	12
計	24	100	44	100	68	100

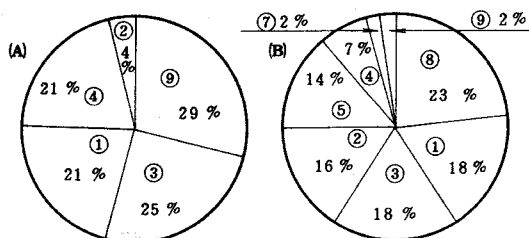


図 2. 継続の理由 (A) 子供, (B) 大人

「日常生活のリズムになっている」等である。さらにこれを大人と子供にわけてみると、大人の場合は、「トレーニング後の満足感がある」というのが比較的多く、ついで「会員どうしの話しが面白い」「効果が現われてきた」「日常生活のリズムになっている」「サウナ風呂があるから」などである。

子供の場合は、「効果が現われてきた」「会員どうしの話しが面白い」「指導者が良い」「仲間ができた」「親に強制されて」などである。これによると、指導者は会員個々の入会目的をはっきりつかみ、それに対するトレーニング方法を考えてやることが第1であり、その入会目的が除々に達成されるよう考え指導することが必要である。又、施設そのものゝ雰囲気明るく保ち、会員相互の会話が健康的なものになる

よう努力することが必要となってくる。こゝに優ぐれた指導者の必要性が唱えられるのである。

次に大変嬉しいことは12%ではあるけれども、トレーニングをすることが日常生活における一定のリズムとなっている会員ができてきたことである。朝起きて食事をし勤務する。夜帰り家族との団欒、そして就寝という1日の生活サイクルの中に、体育・スポーツ活動が、習慣づけられてきたことである。

3. 退会の理由

入会者の約3割強の会員が退会しているわけであるが、この退会者について、その理由を聞いてみると、表4、図3に示すように全体として一番多いのは、「暇がなくなった」が35%、次いで「効果が現われない」が16%、「指導内

表 4. 退会の理由

退会の理由	子 供		大 人		全 体	
	3~14才		19~60才			
	人数	%	人数	%	人数	%
1. 施設が悪い	0		0		0	
2. 指導者が悪い	1	9.1	0		1	3.0
3. 指導内容が悪い	0		4	19.0	4	13.0
4. 交通に不便	0		3	14.3	3	9.0
5. 効果が現われない	0		5	23.8	5	16.0
6. 会員との関係がうまくいかない	0		0		0	
7. 面白くない	0		2	9.5	2	6.0
8. あきがきた	1	9.1	0		1	3.0
9. 暇がなくなった	6	54.5	5	23.8	11	35.0
10. 会費納入が困難	0		1	4.8	1	3.0
11. 友達ができない	2	18.1	0		2	6.0
12. その他	1	9.1	1	4.8	2	6.0
計	11	99.9	21	100.0	32	100.0

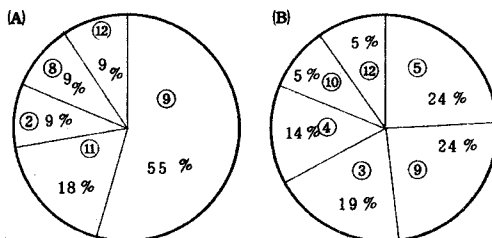


図 3. 退会の理由 (A) 子供, (B) 大人

容が悪い」が13%、「交通に不便」などである。さらに大人と子供にわけて考察すると、大人の場合は、「効果が現われない」「暇がなくなった」が比較的多く、ついで「指導内容が悪い」「交通に不便」などである。子供の場合は、「暇がなくなった」が断然多く、ついで「友達ができない」「指導者が悪い」「あきがきた」などである。

以上のように、暇がなくなったという理由で退会した会員が3割5分の数を示す。これは我々の日常生活にゆとりがないということになるのであろうか。あるいは日本人の勤勉的性格によるのであろうか。又、「効果が現われない」、「指導内容が悪い」、「友達ができない」、「あきがきた」などの理由からみて、先の継続の理由で述べたように、指導者の資質によることが大であるようである。指導者が会員の入会時の目的をはっきりつかむことができないまゝ指導にあたると指導内容が悪いとか、効果が現われないという結果になり、退会することになるので、目的をはっきりつかみ、その目的達成のため、あたゝかい指導助言ができる指導者であらねばなるまい。

次に、「交通に不便」9%の数が示す通り、やはり施設そのものは地理的条件を考え設置することが必要である。

Ⅳ 要 約

自発的グループ活動の促進について考察するため、この調査を行ったわけであるが、結果と考察の項でも述べたように、指導者の資質が第1に問われる。指導者が入会者に対してどのような指導内容で、どのように接して行くかにより継続か退会かに分かれるであろう。

次に施設用具であるが、交通の便が悪いという理由で退会する会員が9%もあるということは設置場所的に考える必要がある。交通の便が良く、駐車場があり環境がよい等々、目的に応じて場所の選定が必要であろう。又、用器具に

ついても使用目的に応じたもので、しかも整然と配置され、使用者の意欲を高めるよう用意されなければならない。

継続の理由に「会員どうしの話が面白い」が19%もあるということは、現社会組織など日常生活圏における上下組織から離れ、体育・スポーツという身体活動を通した平面での会話に精神的な解放感があり、平面的な会話・人間関係の中に己自身を見い出すことをできる喜びにつながるのであろうか。喜びにつながる雰囲気づくりと会員各自のトレーニング後の満足感などプラスすることにより、日常生活のリズムの中に体育・スポーツを取り入れることが可能となるであろう。こゝに、社会体育振興とは体育・スポーツ技術の修得・向上・健康な体づくりだけでなく、楽しみ、うるおい、喜び、幸福といった人間の生きるうえでの糧と喜びにつながるものであると信じる。

参 考 文 献

1. 「健康と体力」3月号臨時増刊文部省体育局監修
体育・スポーツの普及振興に関する基本方針について（答申） 昭和47年12月2日保健体育審議会
2. 栗本義彦・概説社会体育・第一法規
昭和44年 7版
3. 文部省・日本スポーツの現状・教育図書
昭和39年 発行
4. 松島茂善・江橋慎四郎・社会体育・第一法規
昭和47年 発行
5. 財団法人日本体育施設協会・コミュニティスポーツ施設の整備指針 昭和49年 発行
6. 文部省 体育・スポーツの普及振興に関する基本方針について（大蔵省印刷局） 昭和48年2刷発行

富岡元信・佐々木吉蔵・山田良樹・富田幸博

PHYSICAL EDUCATION IN THE COMMUNITY

The present situation and a countermeasure based on
a research in the consciousness of the members of private clubs;

by

M. Tomioka K. Sasaki, Y. Yamada, and Y. Tomita

We have carried out a research by means of questionnaires among those who attend activities of our seminar. Our theme was; how we can connect physical exercises with daily life in order to live a wholesome and cultural life.

We came to a conclusion that we should aim not only at promoting or mastering the techniques of physical exercises or sports, but also at gaining the pleasure, gratification, or happiness out of these activities.

Consequently it is necessary to reform the life pattern of everyone so that he can possess three types of societies, that is, his home his place of work, and his place of physical exercises and sports, the former two forming the daily routine at present.